

小原遺跡群調査概要

—長峰工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—

1989

長野県飯山市教育委員会

序

飯山盆地のはば中央を南北に走る長峰丘陵上には、数多くの埋蔵文化財が知られており、古くから多くの学者によって調査、研究されてきたところあります。

今回の長峰工業団地造成に伴う調査は、その対象面積が80,000m²と広大なものであり、飯山市にとってもかつてない大調査となりました。幸いにも、高橋調査団長・田村調査主任を中心として、多くの地元の皆様の御尽力により発掘調査を完了することが出来ました。

本書は、発掘の状況を簡略にまとめたものですが、今後二年の整理期間をかけて詳しくまとめられます。

出土した土器・石器は専大な量に上り、飯山市のみならず長野県における弥生時代研究にとって欠かすことのできない資料になるものとされています。

本書を刊行するにあたり、発掘調査に御協力をいただいた関係者各位に心から敬意を表し、感謝申し上げます。

最後に、本概要書が埋蔵文化財に対する理解を一層深める上に役立つ事を祈念して序といたします。

飯山市教育委員会 教育長 浦野昌夫

目 次

序・目次・例言	ページ
1 概要	1
A 調査に至るまでの経過	1
B 位置と環境	1
2 調査の方法	5
3 調査の経過	8
4 調査の成果	10
A 長峰越西丘陵地区	12
B 長峰越東丘陵Ⅰ地区	18
C 長峰越東丘陵Ⅱ地区	26
D 南原西丘陵地区	30
E 南原東丘陵地区	38
調査会名簿	42

例 言

- 1 本書は、飯山市が計画した長峰工業団地造成に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、昭和63年7月13日より同年11月10日まで行った。
- 3 調査は飯山市土地開発公社の依頼を受けた飯山市教育委員会（教育長 浦野昌夫）が別に掲げた組織を編成して実施した。
- 4 造構番号は調査時のまま付した。したがって今後の正報告では変更がある。
- 5 調査において下記の諸氏・諸機関からご指導・御協力を頂いた。記して厚く御礼申し上げる。（順不同・敬称略）
河内八郎・佐原真・工楽善通・笠沢浩・光谷拓実・肥塚隆保・小島正巳・宮下健司・黒岩隆・大原正義・太田文雄
- 6 本調査の正式な報告書は、平成2年度に発刊予定である。したがって、本書に掲載した事実は、今後の整理において若干の変更があるかもしれない。
- 7 本書の編集は、調査団が行った。

1 概 要

A 調査に至るまでの経過

飯山市は工場誘致対策の一環として、長峰工業団地の造成を企画し、土地開発公社が施行する計画を立てた。それによれば、造成面積80,000m²で平成2年5月完成予定としている。

この計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていたが、工業団地造成構想そのものは昭和40年代から計画されており、その時点においてはかならずしも周知の埋蔵文化財包蔵地として明確であったとは言えない。また当該地域の造成を行わないと新規計画に移れないという行政側の理由もあり、市教育委員会は昭和63年度の年度途中であったけれども緊急の発掘調査を受託することになった。

しかしながら、以前から協議を行っていたながら年度当初予算には組み入れないなど、大規模な発掘事業でありながら調査の態勢・準備について市は安易に考えていると言わざるを得ない。

また、年度途中であること・他にも大規模な調査を控えていることから、調査は単年度で実施するが、整理・報告書作成は平成2年度まで行うということになっている。

調査対象地は、飯山市大字常盤字長峰越・南原地籍である。大字照里地籍の小泉を遺跡名としておりやや複雑であるが、北側に古くから知られている小泉遺跡があり、近年に至り当該地域まで広がっていると判明し小泉遺跡群としたためであり、これを踏襲している。

B 位置と環境

B位置と環境

飯山盆地のほぼ中央を南北に伸びる丘陵が長峰丘陵である。この丘陵上には古くから弥生時代の遺跡として尾崎・東長峰・照里・下林などの遺跡が知られている。小泉遺跡群は、長峰丘陵が尾崎で終る支脈と、照里へ続く支脈の分岐点に当たり、外様平の低湿地帯が入り組んでいる地点に立地する。仔細に見れば小河川に開拓された丘陵上の台地がいくつか観察される。この開拓低地は、現在ではほとんど埋没しており、水源も乏しい。対象地区内には、4つの微高地があり南から長峰越西丘陵・長峰越東丘陵・南原西丘陵・南原東丘陵と仮称することにした。

この4つの丘陵上に、弥生時代を中心とする遺構が確認された。詳細は成果の項で触れるが各丘陵ごとに若干時期が異っている。整理作業を行っていないため詳しく述べることはできないが、周辺の遺跡群との関係も含め弥生時代の集落変遷の動態が明らかにできるものと思われる。

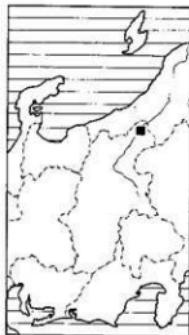


図1 遺跡の位置



写真 1 小泉遺跡群航空写真 Scale 1 : 5.000 (株バスコ撮影)

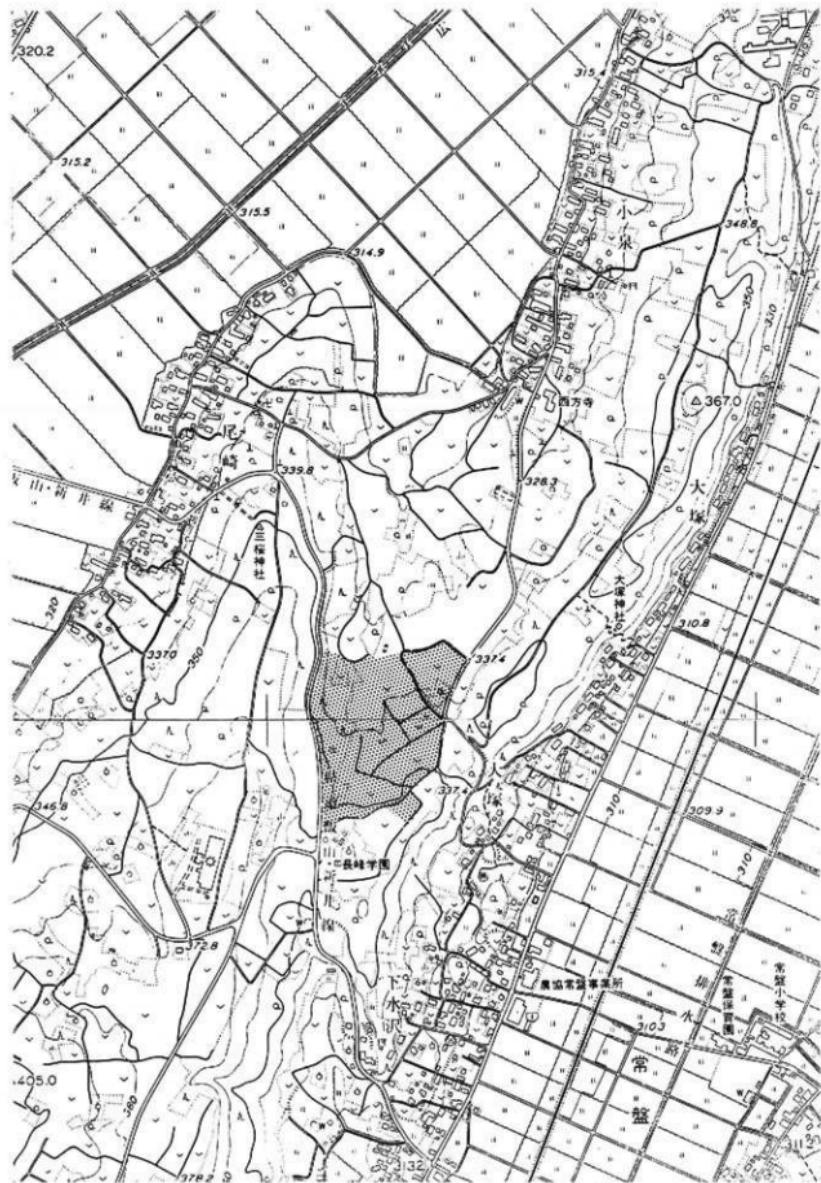


図2 調査地区位置図 (1:10000)



写真2 戸狩スキー場より小泉遺跡群を望む

長峰丘陵が戸狩に向かう支脈と尾崎で終る支脈の分岐点に位置する。北側（手前）に外様平の低湿地帯が広がる。



写真3 小泉遺跡群近景

調査地区は、丘陵状地形と谷状地が入り組み複雑な微地形を呈している。左側が長峰越東丘陵地区、右側が長峰越西地区である。

2 調査の方法

現地協議段階（昭和61年10月）においては、対象面積80,000m²のほぼ全面に遺跡が広がっているだろうとの予測を示し、試掘調査を経て特に濃密に分布する20,000m²以上を調査することとした。また、谷状地が入り込んでいることから、水田址の確認で150,000m²を調査することにした。

しかし、実際の調査では工事工程の関係で年度途中急に実施することとなった。調査対象地区は既に作物が植え付けられており、そのため試掘調査はもとより、調査地区的選定も自由とはならなかった。

調査は、広大な面積のため公共座標系で位置付けることにし、50mピッチで十文字に設置した。この基本正方眼坑の中心点はX=99.0km Y=10.75kmである。これをさらに5mに分割してグリッドとした。番号は、北から南へ1～、東から西へA～としたが拡張にともないイ・ロ・ハ…も使用した。

発掘は、作物の関係により長峰越東Ⅰ地区および長峰越西地区にかけて開始し、取り入れが済んだ地区を次々に選定しながら行った。

なお、遺構内の出土遺物は全てドットで記録し、レベルを計測した。



図3 基準杭設定図 (1:2,000)

写真4 ①表土除去

耕土の厚い部分は重機を使用して取り除いたが、土器などが多く出土する地区は人力で取り除いた。発掘で最も重労働である。（長峰越東地区谷の調査）



写真5 ②遺構確認作業

掘り下げていくと、住居跡などの部分が黒く落ち込みとなり、土器などが出土してくる。注意深く竹べら等で掘り出す。（長峰越東地区）



写真6 ③ 遺構検出状況

赤土を掘り込んで住居を構築（堅穴住居址）したため、廃絶されたあと黒色土がその部分に流れ込み、もしくは埋められて黒い部分となって現われる。（南原東丘陵地区）





写真7 ④ 遺構内の調査

検出された遺構は、土層の堆積状態を調べるために十文字の帯状に残し掘り下げて行く。



写真8 ⑤ 実測作業

遺構内の遺物は、出土した地点・高さ等を記録するために出土した状態のまま残しておき、平板・レベル測量を行う。こうした記録作業も全て地元作業員の手で行われた。



写真9 ⑥ 全体測量

発掘が全て完了した地区は、写真撮影等を行った後全体測量作業に入る。

3 調査経過

発掘調査は、7月13日より11月10日迄行った。既に触れてきたように、畑の作付が完了しており、買収も全て終了しているわけではないので実際には調査出来る体制ではなかった。

そのなかで、所有者の了解がとれしており、遺物が多く採集されている長峰越東I地区の一部より開始することができた。その後、谷地区・長峰越西地区へ入り、作物の取り入れが始まった9月に入り本格的に調査することができた。なお、周辺の花木栽培の畑は苗の移植を翌年度に行う予定となっており、調査することはできなかった。菓煙草が中心の長峰越東II地区へは、9月下旬より入った。上方ヘトレンチを入れたが遺構は確認できず、ほぼ遺構の限界を確認することができた。

10月に入り、新たに南原西丘陵地区に着手することになった。わずか900m²の調査であったが、住居址を8軒検出するなど中心部の一つであることが判明した。また、この部分は他地区に比して遺構の遺存状態が良好なことから、全て遺物分布図を作成することとした。なお、遺構の検出状態から東北側に続くものと考えられるが、対象地区外であることから拡張は行わなかった。また、南側は花木の苗取りが済んでいたため未着手となった。10月の下旬には周辺に積雪があり、最後の台地である南原東丘陵地区に全員で移動した。やはり作物の関係で調査地区は限られていたが、中心地区は調査できたと考えている。

発掘調査は11月10日に完了したが、実測作業が残っておりみぞれ混じりの中約1週間行った。以下に経過の概略を表に示す。

昭和63年度

月	日	内 容
7	1 4～ 6～ 8 12 13 16 28	調査委託契約締結 基壇杭設置 表土除去(牽引機) 調査会 器材運搬 調査開始(長峰越東丘陵I地区) S101より炭化木製品出土 長峰越西丘陵着手 先土器時代石器出土
8	2 4 11 12～17 23 29 30	先土器時代土坑検出 飯山郷土史研究会見学 中間報告会 休 み 市教育委員視察 長峰越東谷地区写真撮影 常盤分館・学習会見学
9	1 7 17 22	長峰越東丘陵I地区全体測量完了 長峰越西丘陵地区概測(U-X-47～52) S110件(遺物分布図作成作業開始) 長峰越東丘陵II地区精査
10	15 17 26 29	瓦砾堆内・東丘陵地区完了 南原西丘陵地区着手 市木舗助役・浦野教育長視察 南原東丘陵地区抗打ち 初雪
11	10 15 17 25	発掘完了 現地説明会 信濃毎日新聞記事掲載 測量調査



写真10 調査風景（10月19日）

調査の主体は市内一般の方々である。一週間も従事すればもうベテランといえる。



写真11 調査に携わった人達

（木浦飯山市助役・浦野飯山市教育長視察時）

4 調査の成果

調査対象地約80,000m²の内12,100m²の調査を実施した。その結果、遺構の範囲は約60,000m²にも及ぶ大遺跡群であることが確認された。

対象地は4つの丘陵とその間に入り込む谷に地形分類されるが、住居址などの居住区は丘陵上に展開されている。この丘陵を南より長峰越西丘陵・長峰越東丘陵・南原西丘陵・南原東丘陵と呼称し、それぞれ地区名とする。調査地区は、これらの丘陵の調査可能範囲部分を中心として調査し、一部谷状地・湿地の調査も実施した。

検出された主な遺構は、弥生時代中期堅穴住居8、後期堅穴住居17、掘立柱建物35、旧石器時代土塁1等である。時期判定は整理を行ってないために今後変更もありうる。また、その他・溝状遺構等も數多く検出されているが、本概要報告では触れない。

以下に各丘陵地区別に触ることとする。

1 長峰越西丘陵——馬の背状台地である。本地区からは、約17,000年前の旧石器時代の石器約100点およびこの時代では殆ど発見されることのない土広が発見されている。また、この丘陵が本格的な居住地区となったのは約2,000年前の弥生時代中期であり、丘陵全体に痕跡が認められている。主な遺構は、堅穴住居址3軒、掘立柱建築址16軒、土塁墓1である。なお、確認された遺構は全て弥生時代の時期と考えられる。

一部花栽培のため調査できなかった部分があるが中心地区は殆ど調査し得たと考えている。

2 長峰越東丘陵——地区内で最も広い平坦面を有する丘陵である。弥生時代の住居址12軒が発見されている。

注目される遺物としては、住居から出土した炭化木製品がある。奈良国立文化財研究所で鑑定・保存処理を行っていただいている。

また、西・東丘陵の間の谷でもおびただしい土器が出土し、弥生時代の谷利用状況がそっくり復元できた。

3 南原西丘陵——作物の関係で10月に入り着手した。

わずかな範囲しか調査できなかつたが、弥生時代の住居址8軒を発見した。1軒のみ中期であったが、他は後期前葉である。北側は地区外のため保存されるので調査の必要はないが、東側は菊の苗があり拡張できなかつたものの井戸が半分発見されており重要な地区である。

4 南原東丘陵——作物が作られており一部の調査に終ったもののほぼ中心部は調査したと考えられる。弥生時代中期の單一遺跡で、飯山地方で最も古い弥生時代の遺跡のひとつと考えられる。

以上4つの丘陵上の遺跡について概要を示したが、これらは、別々の遺跡ではなく例えばその間の谷も生活空間の重要な一部であったろうし、生活の丘陵と墓域の丘陵というように時代ごとに密接な関係を有していたことは充分に推定される。

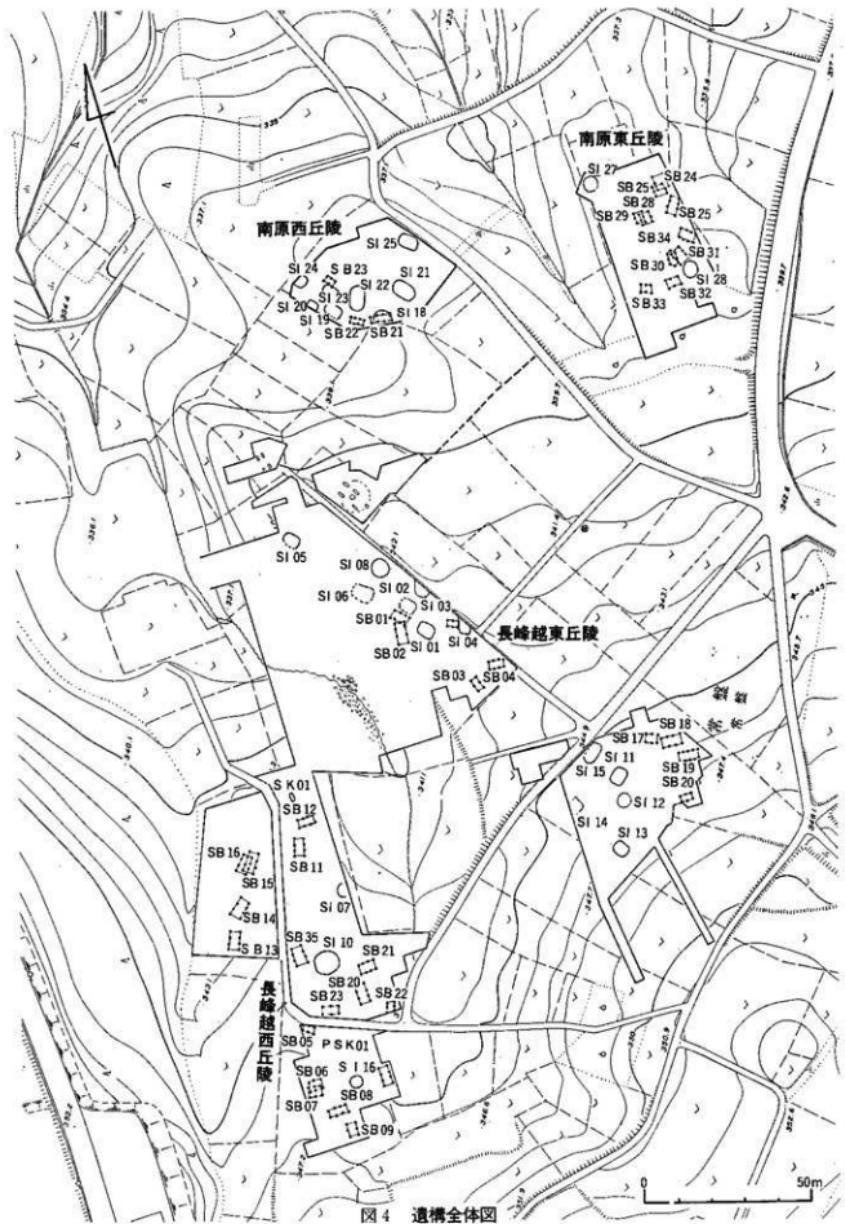


図4 遺構全体図

A 長峰越西地区

1) 概要

調査対象地区の最も南側に位置する。東西を小支谷によって開析され、馬の背状台地を呈する。調査面積は、3900 m²である。黒色土が薄いため褐色土層（赤土）まで耕作が及び、多くの遺構は破壊を受けていた。

発見された主な遺構は以下のとおりである。

先土器時代土塙 1 (P SK01)

弥生時代中期堅穴住居址 3 (S 107・10・16)

弥生時代中期土塙墓 1 (SK01)

弥生時代掘立柱建築址 17 (SB05~16・20~23・35)

出土遺物は、先土器時代石器約100点、弥生時代中期土器・石器が多く出土している。本地区の特徴はあまり発見されることのない先土器時代の土塙が検出され、あわせて周辺より石器が発見されたこと。弥生時代は中期の上器のみ発見され、後期の痕跡が認められること。掘立柱建築址が堅穴住居址に比して異常に多いことの3点が挙げられる。



写真12 長越峰西丘陵地区

北側より望む。耕土（表土）が薄いため多くの遺構が破壊を受けていた。

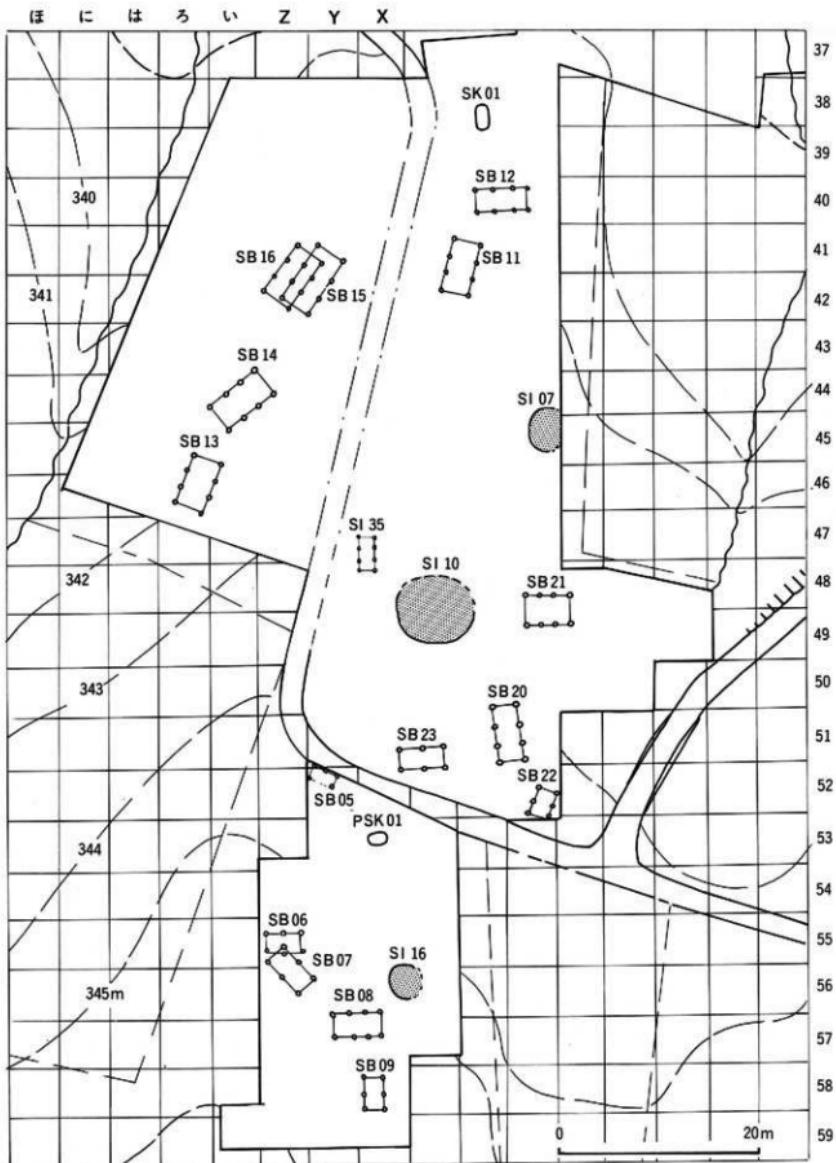


図5 長峰越西丘陵地区全体図 (1 : 500)

2) 先土器時代

W・X—53・54区を中心に約100点出土した。出土層準は黄褐色土層上面であるが、上層の黒色土層が薄いために耕作により黄褐色土層の上部は失なわれている。

出土した土器は、安山岩を主体とした1・2点真岩系の石材が用いられている。剝片がほとんどであるが、ナイフ形石器・彫刻刀・抉入石器等の利器も含まれている。石器形態及び剥離技術からナイフ形石器盛行時と考えられ、飯山地方においても比較的古い部分に編年的位置を考えられる。

なお、該期の土壙が1基検出されている。190×174cmの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。覆土はやや軟く砂粒を多く含んでおり容易に埋土が確認できた。塙底より石器が検出されており、明確な造構と断定できる。

3) 弥生時代中期

本丘陵が居住地として最も利用された時期である。該期の造構は概要で触れたとおりであるが、3軒の堅穴住居址は、すべて円形プランで周溝をめぐっている。遺存状態が悪く、周溝と

床面のみの検出であるが、ビット内に置かれた伏甕は残存していた。なお住居址のほぼ中央には作業用と思われる土壙があり塙内より多数のチップ類が出土している。これらは三軒共通の事であり、住居形態の同一性が伺われる。

掘立柱建築址は、周辺より弥生中期以外の土器が全く検出されないことから該期と考えた。規模は1間×3間ないし1間×2間のいずれかである。

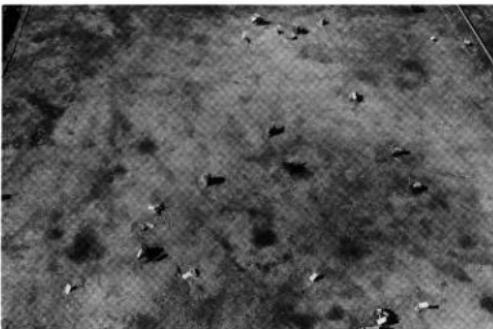


写真13 先土器時代石器の出土状況

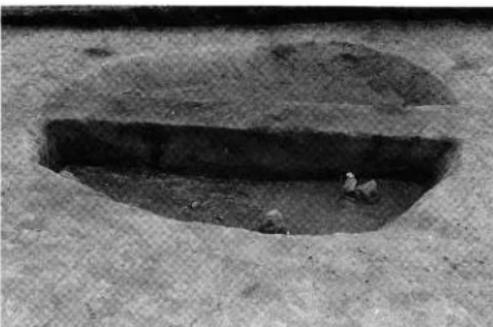


写真14 先土器時代の土壙

写真15 弥生時代中期の円形竪穴住居
(S I 10)

深耕ロータリーなどにより破壊され
わずかに周溝と床面が確認された。周
溝が何本もめぐっているのがわかる。
おそらく建て替えたものであろう。

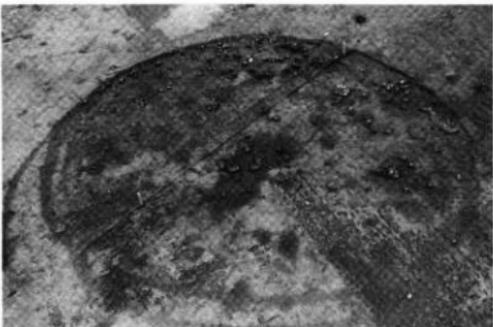
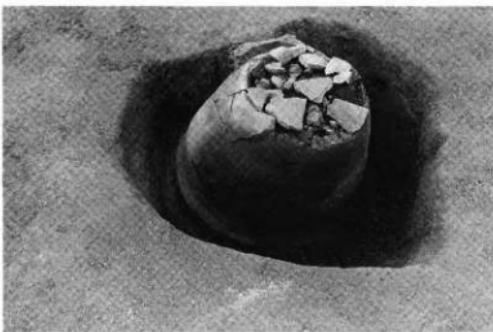


写真16 ピット内より出土した埋甕
(S I 10)



写真17 ピット内より出土した伏甕
(S I 10)



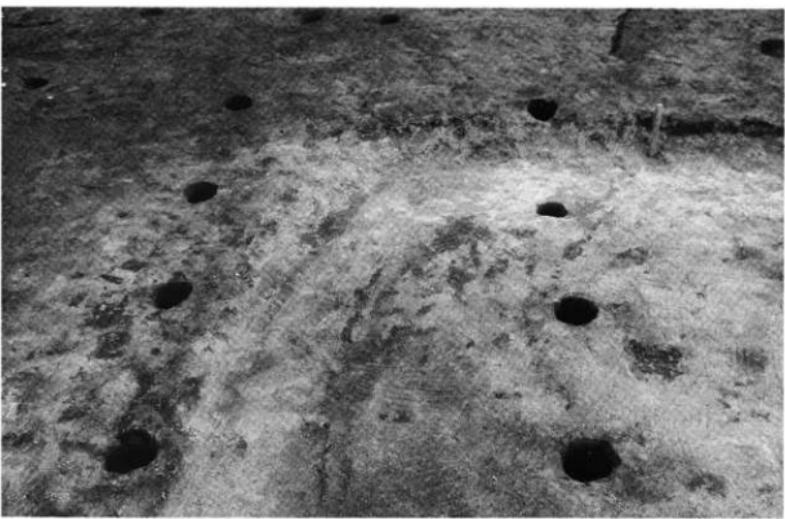
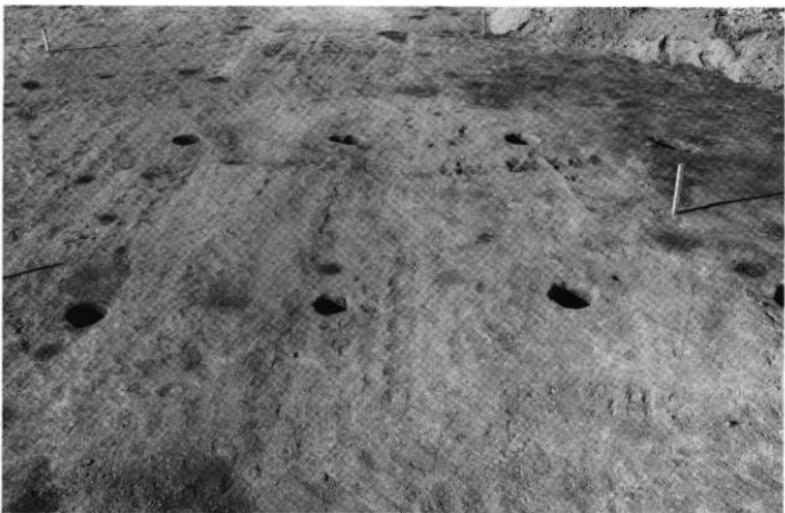
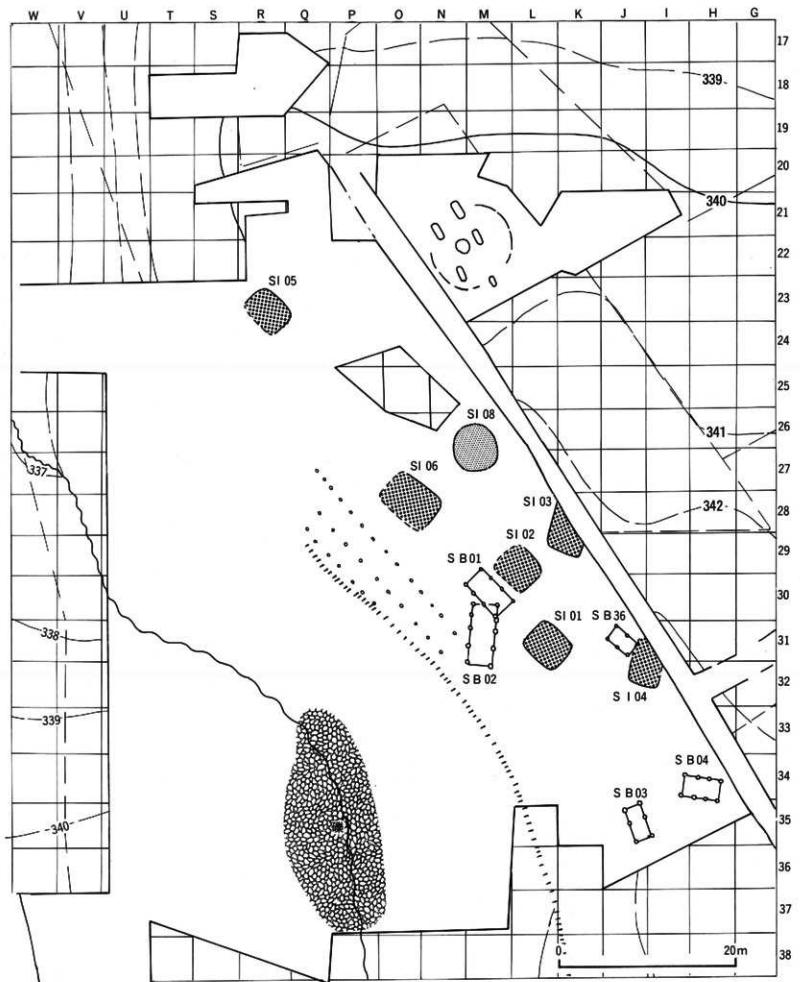


写真19 挖立柱建物（S B09）

柱の穴を掘り、高床式としたものであろう。倉庫と考えられるが、堅穴式住居址の5倍と多く、住居としての可能性もある。



B 長峰越東丘陵Ⅰ地区

本地区は、最初に着手した地区であるが、一部作物の関係もあって最後まで調査を行った。全体で約5000m²を調査している。

本丘陵は、調査地区で最も広い平坦面を有しているが、丘陵平坦面の多くは花木栽培が行われており、丘陵地の調査は、全体の約30%である。また、丘陵西・南側は谷状地となっており、この斜面および低湿地の調査も行った。

検出された主な遺構は、弥生時代中期整穴住居1、後期整穴住居6、掘立柱建物5で、他に土壙・柱列等検出されている。遺物は当該住居出土の土器、先土器時代石器、土壙より細形管玉10、谷状地より管玉石包丁など出土したのが注目される。特に注目すべき遺物は、SI 01住より出土した炭化木製品である。表・裏にそれぞれ精巧な流水紋・雷文が彫られている。形状から紡織具に類似するが、前記文様の施された紡織具は初見であるという（奈良国立文化財研究所・佐原・工楽両氏等による）。

谷状地の調査は、厚い黒色土が堆積しており調査が手間取ったが、おびただしい礫とその間に多量の弥生中期上器片が出土した。後期の土器がほとんど見られないことから、中期にこの地区を利用していた事が伺える。

図6 長峰越東丘陵Ⅰ地区全体図 (1 : 400)



写真20 丘陵上の調査

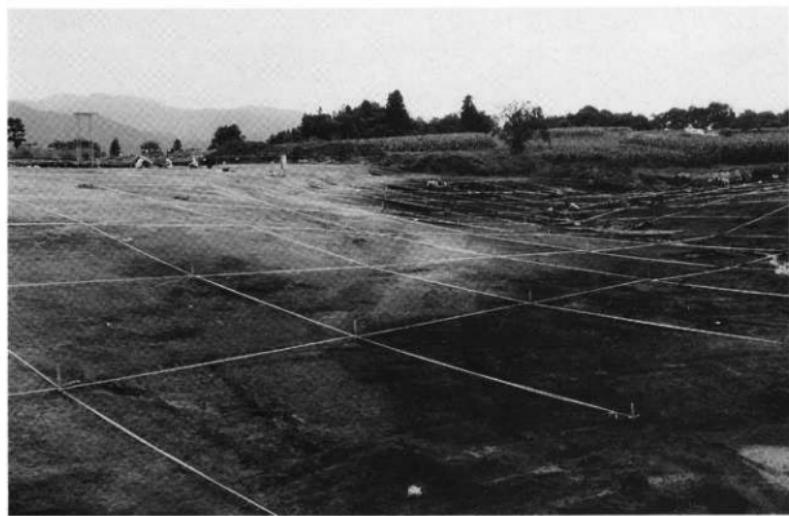


写真21 谷の調査

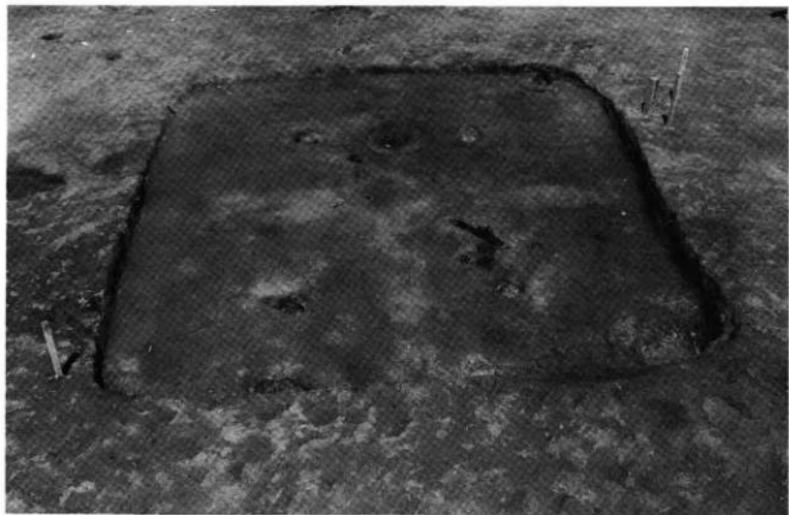


写真22 弥生時代後期の竪穴住居（S I 01）



写真23 S I 01住より出土した炭化木製品



写真24 弥生時代末の竪穴住居（S I 04）



写真25 S I 04出土 小形甌

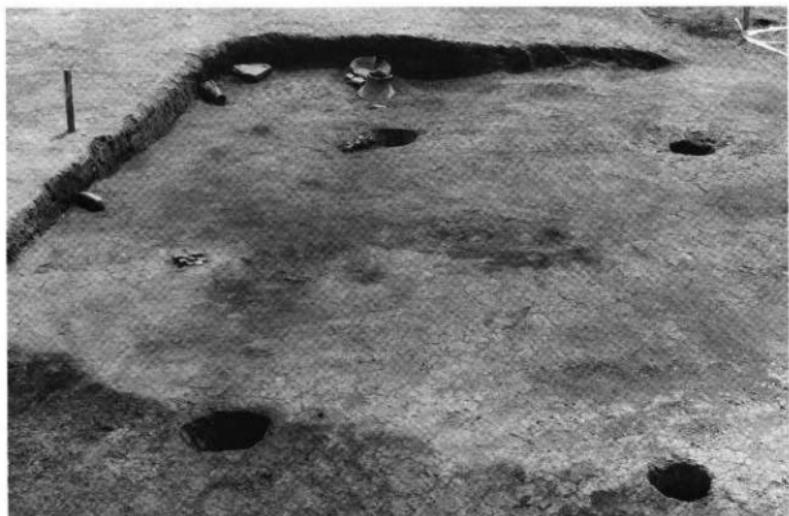


写真26 弥生時代後期の堅穴住居

斜面のため谷側（南側）が破壊されている。4本の主柱穴がはっきりわかる。
炉は手前（西側）の柱穴の間にある。



写真27 破壊をまぬがれた東北側に遺物が出土している。



写真28 壺形土器



写真29 磨製石斧 (住居址内から出土するのは珍しい)

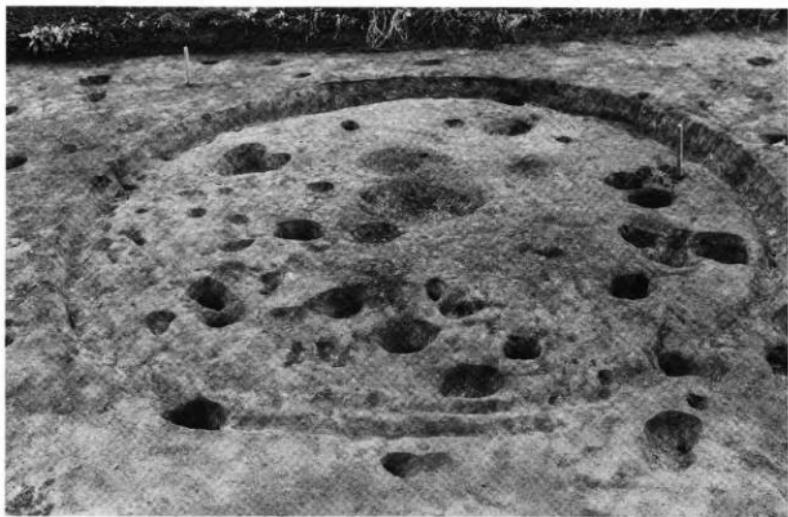


写真30 弥生時代中期の竪穴住居（S I 08）

円形で周溝をもつ形態は本遺跡群の中居址に共通している。

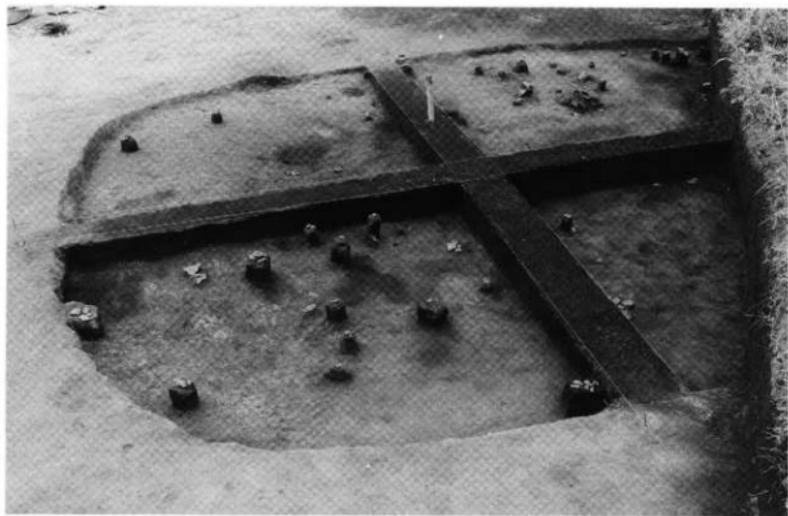


写真31 弥生時代後期の竪穴住居（S I 03）

一部道路にかかったため全体を調査していない。



写真32 谷の調査

おびただしい礫と、その間に多数の弥生時代中期の土器が出土した。
当時における谷の景観である。

C 長峰越東丘陵II地区

調査区内において最も高位に位置する。南側はさらに高位となり、西側は西丘陵との間の谷状地に向って傾斜を増す。

検出された主な遺構は、弥生時代中期竪穴住居址1、後期竪穴住居址4、掘立柱建物4である。

深耕ロータリーにより破壊を受けているものが多く、遺物は柱穴等出土のものはかろうじて原形を保っているものの、多くは小破片となっている。

なお南側の高位ヘトレンチを入れたが遺構等は検出されずほぼ限界を確認できた。



図7 長峰越東丘陵II地区全体図 (1 : 400)



写真33 弥生時代中期の竪穴住居（S I 12）



写真34 柱穴内より出土した壺形土器（S I 12）

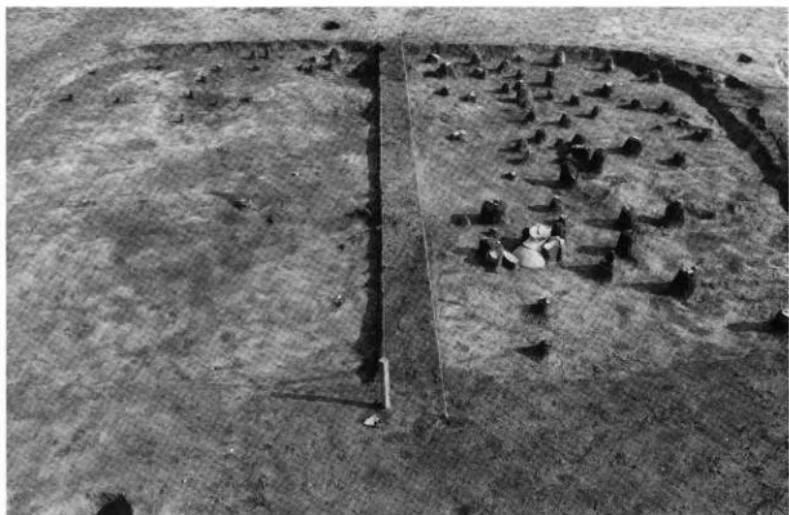


写真35 弥生時代後期の竪穴住居（SII 11）



写真36 赤色塗彩された壺形土器（SII 11）

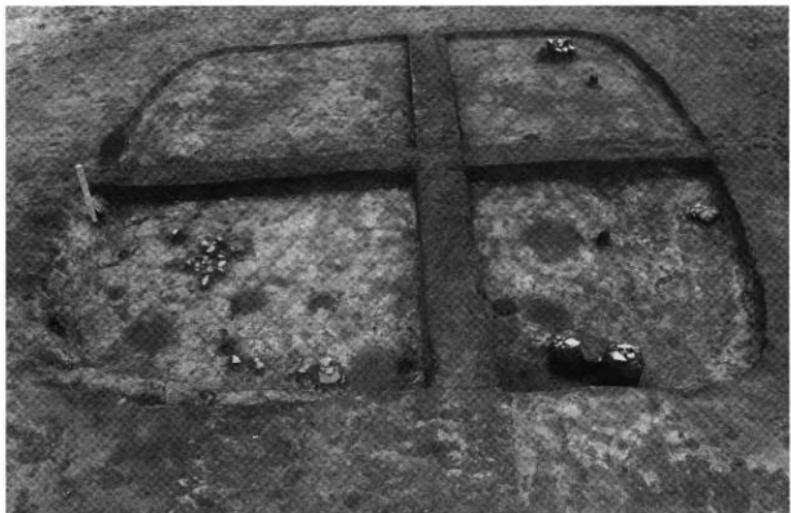


写真37 弥生時代後期の竪穴住居（S I 13）



◀写真39 台付甕出土状況（S I 13）



写真40 麝形土器出土状況（S I 13）▶

D 南原西丘陵地区

長峰越東丘陵と谷状地を隔てて馬の背状に張り出した丘陵である。比較的幅の狭い平坦部であるが、その一部 900 m²の調査を行っている。

検出された主な遺構は、弥生時代後期竪穴住居 7 軒、中期 1 軒、掘立柱建物 3 軒である。配置は西側の谷側斜面に密集し、平坦部は空白部となっている。中期の竪穴住居址は、南側部分が細地の段差により破壊されているが、周溝をもつ円形プランを呈するようである。後期の竪穴住居はおそらく二時期以上に分かれるとと思われるが、住居プランでは梢円形プランに近い隅丸長方形の住居址（S I 21・22）と隅丸長方形プランを呈す住居址（S I 23・25）の 2 形態がある。構造的には、4 本柱を主柱とし、奥側の二本の間に炉があり、入口と思われる短辺壁側には間隔の狭い二本の柱穴が並ぶ。またその壁下右側に貯蔵穴と思われる土塗がある。この形式は、後期住居と考えられる遺構すべてに共通しており、強い齊一性が伺える。

掘立柱建物は三軒確認されている。SB18は弥生中期の住居（S I 18）床面を破壊して構築している。

出土遺物では、中期（S I 18）の住居址はほとんど破壊されていたため、土器片・石鏃など少量であったが、他の後期住居址は比較的よく保存されていた。壺形土器・甕形土器・高杯・鉢・鬹など完形品が多く出土している。

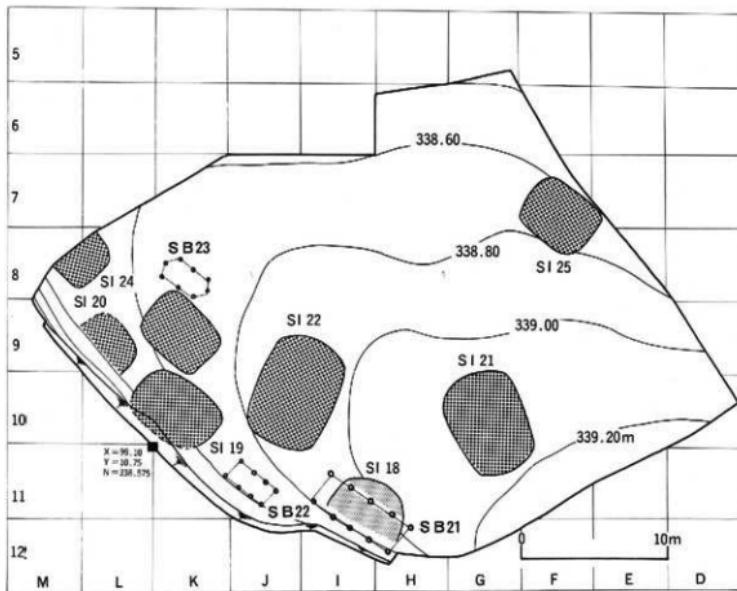


図 8 南原西丘陵地区全体図



写真40 南原西丘陵地区遠景

手前が谷状地となり、奥にもう一つの谷があり東丘陵に続く



写真41 南原西丘陵地区近景（地面を掘り込んだ整穴住居址が並ぶ）



写真42 調査風景

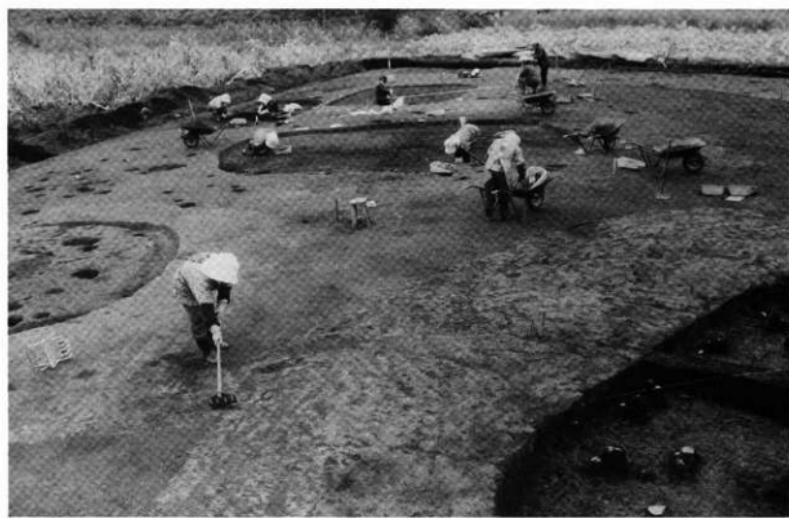


写真43 調査風景

写真44 弥生時代中期の堅穴住居址
(S I 18)

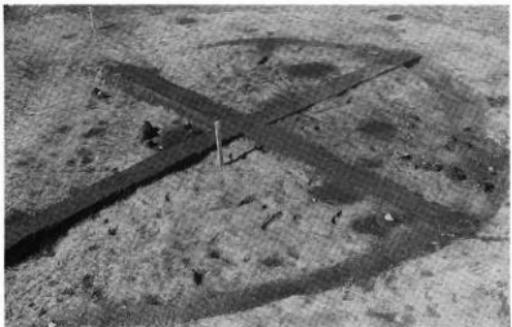


写真45 弥生時代後期の堅穴住居址
(S I 19)



写真46 弥生時代後期の堅穴住居址
(S I 24)

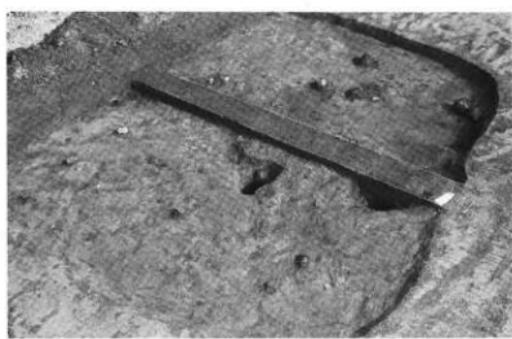


写真47 弥生時代後期の竪穴住居址
(S 121)

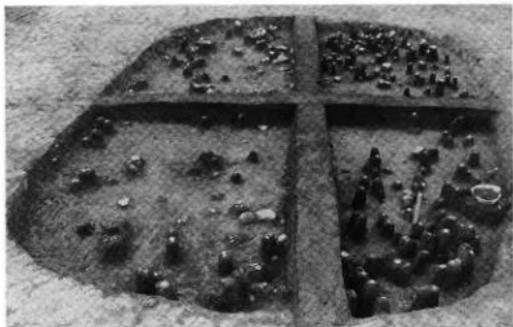


写真48 伏せた状態で床面より出土した壺形土器
耕作等により半分失なわれている (S 121)



写真49 貯藏穴(?)内より出土した壺形土器
(S 121)

写真50 竪穴住居址全景 (S 121)

四本柱を主柱とし、手前に入口施設と思われる柱穴が2本並ぶ。その右手前には貯蔵穴と思われる土塙がある。奥の中央には炉があり、焼上が真赤になって残っていた。

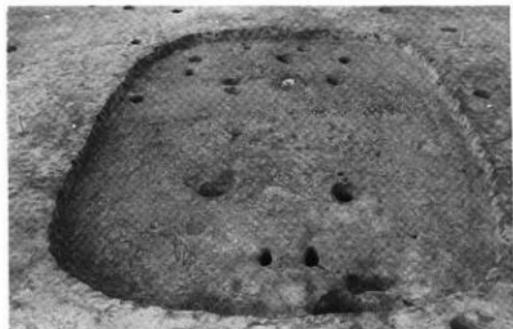


写真51 弥生時代後期の竪穴住居址

(S I 22)

規模は S I 22 とほぼ同様である。

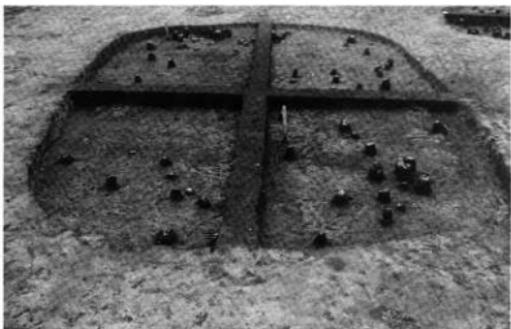


写真52 赤色塗彩された鉢と高坏

(S I 22)

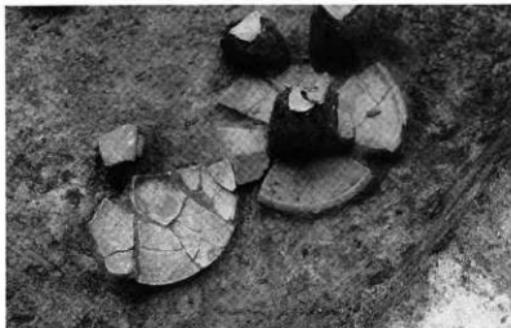


写真53 竪穴住居址全景(S I 22)

主柱穴・炉・貯藏穴などの位置は
S I 22 と全く同じ。こうした同形態
の住居址は 5 軒以上認められ、ほぼ
同時期と考えられる。

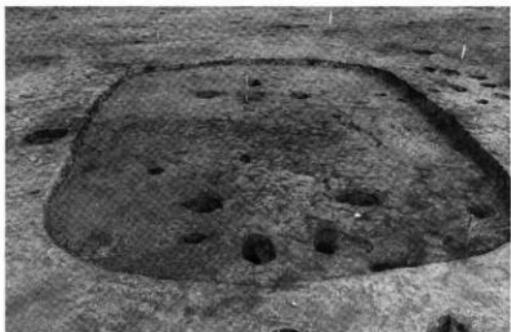


写真54 弥生時代後期の竪穴住居址
(S 123)

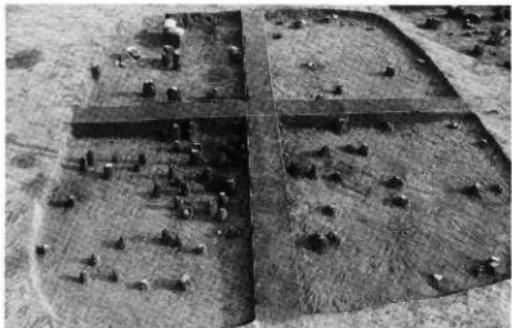


写真55 住居址全景 (S 123)

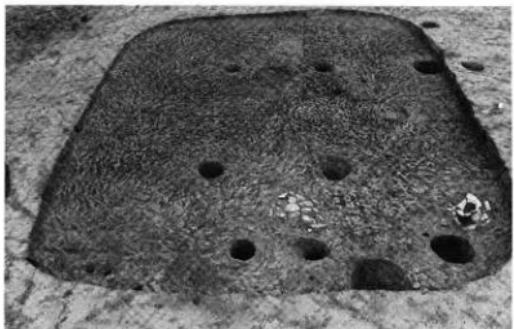


写真56 壺形土器出土状況 (S 123)



写真57 弥生時代後期の竪穴住居址
(S 1 25)



写真58 变形土器出土状況 (S 1 25)



写真59 陶器出土状況 (S 1 25)



E 南原東丘陵地区

調査対象地区の最北部の丘陵である。北に向って張り出し、やや西側に緩傾斜を示している。調査区はこの丘陵の基部で、東・西に小支谷が入り組む。遺構は東側斜面から平坦面にかけて集中している。

検出された遺構は弥生中期堅穴住居2軒、掘立柱建物10軒、土塙1基である。

堅穴住居は、周溝をもつ円形プランで同形態であるが、約50mの距離がある。

掘立柱建物は重複が認められるが、10軒確認されている。いずれも1間×2間、1間×3間で、深さ35cm以上を測るしっかりしたものである。SB31から確認面の上位において、正位に置かれた小形甕が出土している。

土塙は明確なものは一基のみである。弥生中期の鉢形土器が出土しているが、その出土状態から、壊されてからまとめて埋められたものと考えられる。



写真60 南原東丘陵地区および外様平北部を望む

南原東丘陵地区

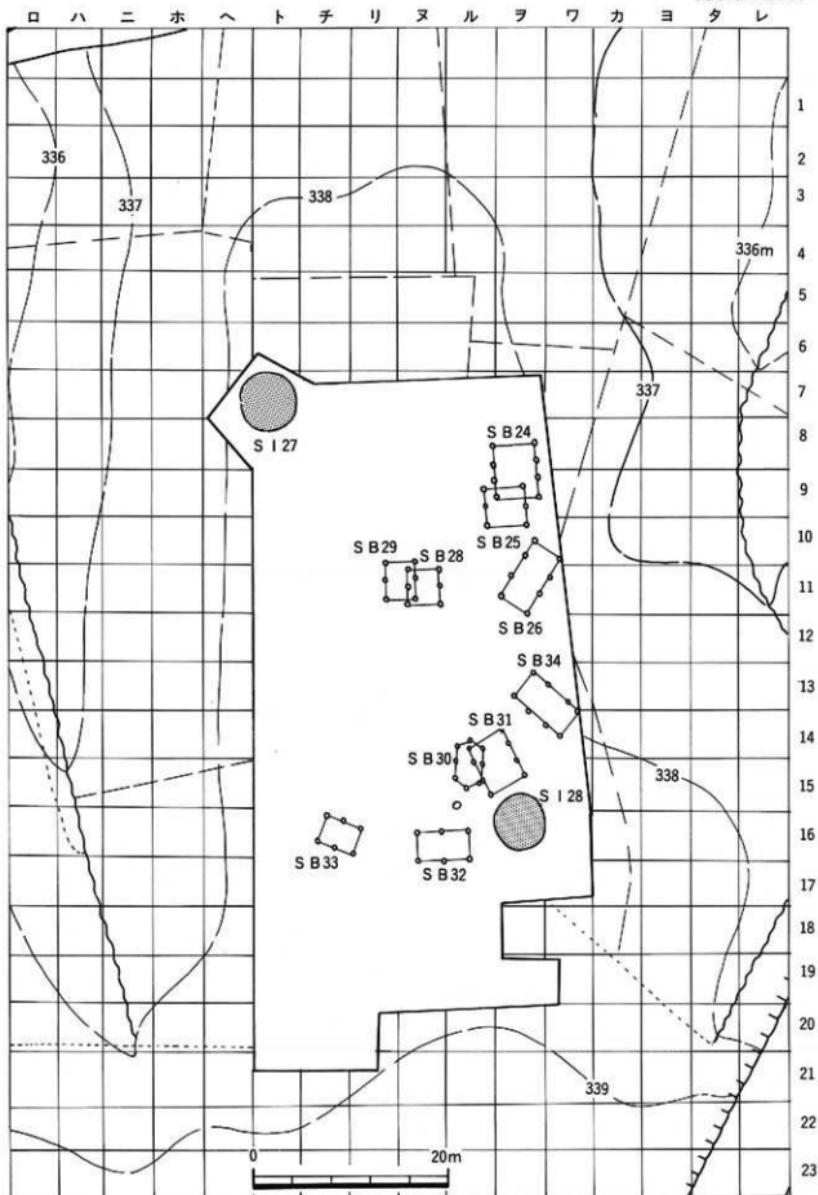


図9 南原東丘陵地区全体図 (1 : 500)



写真61 南原東丘陵地区全景



写真62 弥生中期の住居址(S 1 27)

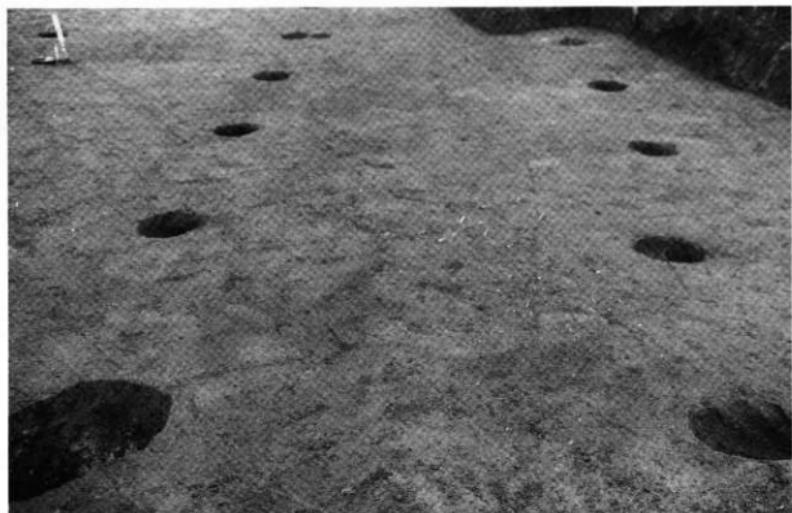


写真63 捜立柱建物（S B 26）

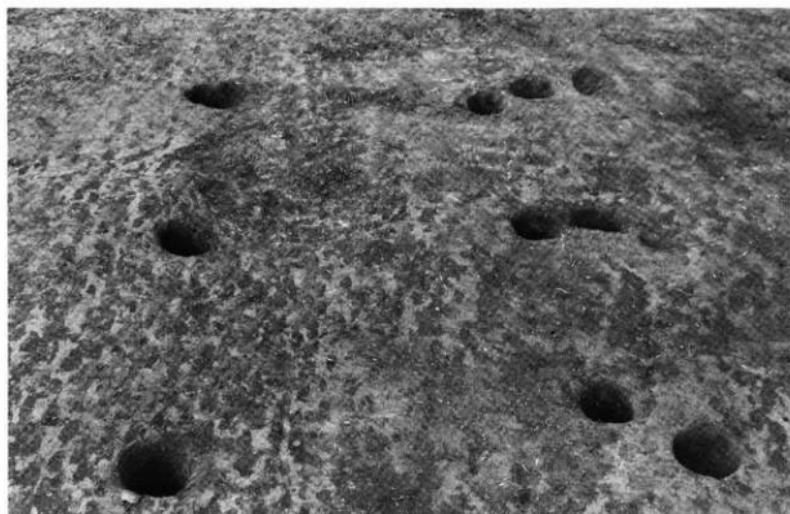


写真64 捜立柱建物（S B 29）

小泉遺跡群調査会名簿 (昭和63年度)

顧問 小野沢静夫 (飯山市長)
会長 浦野 昌夫 (飯山市教育長)
副会長 佐藤 清 (飯山市教育次長)
委員 高橋 桂 (日本考古学協会会員)
〃 宮沢 郁夫 (飯山市議会議員)
〃 栗岩 時雄 (〃)
〃 高橋 正治 (〃)
〃 高橋 広幸 (下水沢区長)
〃 井村 庄雄 (大塚〃)
〃 丸山 富久 (小泉〃)
〃 飯沢 澄男 (尾崎〃)
〃 岸田 正 (市公民館常盤分館長)
〃 飛沢 五夫 (市商工観光課長)
〃 服部栄八郎 (市土地開発公社局長)
〃 市川 和夫 (〃 次長)
〃 町井 和夫 (〃 主査)
事務局 清水 宏 (市教委次長補佐兼社会教育係) S 63. 10. 1 転出
〃 渡辺 博 (市教委社会教育係) S 63. 10. 1 転入
〃 望月 静雄 (市教委社会教育係)
〃 森崎ツギ子 (市教委臨時職員)

調査団

団長 高橋 桂 (飯山南高校教諭)
調査主任 田村 涉城 (市教委埋蔵文化財調査員)
調査員 望月 静雄 (市教委社会教育係)
〃 森山 茂夫 (市内太田小境)

調査参加者 (順不同、敬称略)

高橋茂・小林新治・大塚一雄・丸山三二・達家わかの・藤沢昭・常田利夫・村松修司・岡田勤・丸山幸大・藤沢信義・高橋昭二・高橋宗平・山崎豊治・宮本さか江・服部正子・服部こう・南久保まつ・西堀はづみ・吉越信一郎・大木あい・吉越まさの・島津千代・北山けえ・丸山澄子・山岸正宣・栗岩義房・山田隆志・岸田義元

高橋雅弘・丸山学 (以上大学生)

青木正行・岸田輝幸・足立智幸・富岡徹・藤沢徹・樋口史・藤沢英明・佐藤真也・津久井琢也・菊池泰隆・金井久江・市村正・阿部浩美・江尻裕二・渡辺孝・宮沢智博 (以上高校生)

江尻昭二・中村昭三・藤沢澄夫・山本貞夫・東条寅雄 (以上教育委員会事務局職員)

協力機関

奈良国立文化財研究所 飯山市公民館常盤分館 (武田誠主事)・㈱バスコ

飯山市埋蔵文化財調査報告書 第20集

小泉遺跡群調査概要

発行 平成元年3月31日

発行者 飯山市教育委員会

飯山市大字飯山1110-1

編集者 飯山市小泉遺跡調査団(団長 高橋桂)

印刷所 有限会社 足立印刷所

飯山市大字常郷581-1 ☎65-2079

